

一枚の絵







自分から全てをもち取り、引き剥がすような風圧がたまらなかつた。

これから毎日この時間に、彼はこの坂道を駆け下り、職場に向かうのだ。

青年の名は石川圭という。

地元でも面倒見のよさで定評のある、中堅どころの「あすなる塾」が彼の職場で、三階建ての自社ビルは駅裏から歩いて五分の市道沿いにある。小学生の授業が五時から始まり、中学、高校生が帰るのは九時四十五分であるが、勤務時間は午後三時から十時、専任講師が三人と事務兼經理のパートが一人、他に二人のパート講師と学生アルバイトもいる。

塾長の北岡亮介のつてで英語の講師を始めてまだ二週間だが、石川はこの仕事に気に入っている。出勤時間の遅いのがよい。朝から午前中いっぱいを自分のために使える。塾で教えることは学生時代に経験している。

自転車を駐輪場に置くと、彼は元気よく「あすなる塾」一階事務室のドアを開けた。

「おはようございます」

事務兼經理の下崎京子が笑顔で挨拶を返す。